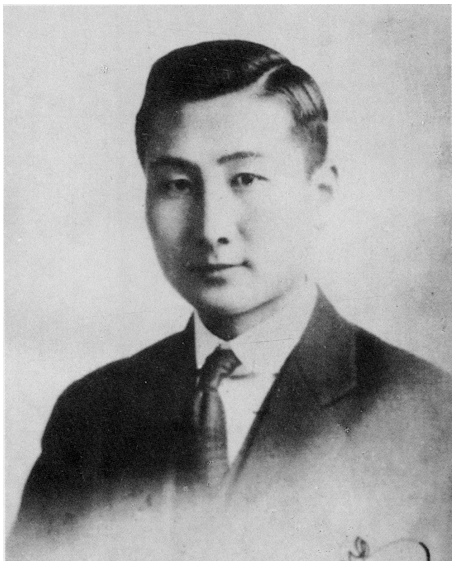
白雲千載　英霊永存

（白雲のように英霊は永遠である）

祖父王希天殉難九十周年



王希天

王旗（王希天の孫／
王希天研究会会長
王希天基金会会長）

皆様こんにちは。

今年の9月12日は、私の祖父である烈士・王希天の殉難90周年にあたります。革命に殉じた烈士を祀り、天に召された祖父の霊を悼むと、私の気持は高ぶり、なかなか静まることはありません。

往時を振り返ることは辛いものです。1923年9月12日黎明、地震の機に乗じて華僑虐殺を行った日本の軍・警察を訪ねた祖父が殺害されました。わずか27歳の若さで殉難したのです。その情景はまさに、「希天君が若くして殉難したことより、富士山は頭を垂れ涙を流し、竪川は哀しみに泣いた」であります。歴史上に起こった一幕が想像できます。それはなんと無残で悲壮なことでしょう！その時々、その情景において、祖父の声、姿、笑顔が私の眼前に浮かび上がり、あの模糊たる祖父の歴史的記憶がどんどんとはっきりしてきます。

王希天は元の名を王熙敬といい、1896年に長春金銭堡にて民族・民芸品製造を営む家庭で生まれました。1914年秋、救国救民の真理を探究するため日本に留学し、第一高等学校に在籍していた時期、学友である王朴山の紹介で周恩来と知り合い、深く厚い友情を結びました。1918年5月、周恩来、李達、鄧中夏、許徳珩、呉伯涛らとともに、愛国・反帝国主義の「拒約（中日軍事密約反対）運動」を提唱し、留日学生民主革命闘争を先導します。同年5月、自ら主体となり「留日学生救国団」を組織し、その代表として帰国してからは、北大の学生代表である鄧中夏、許徳珩と会談し、ともに北京、天津、上海での

「拒約請願」闘争の波を最高潮まで押し上げます。同年8月、「拒約運動」が反動当局の弾圧を受けると、ハルビン東華中学に赴き「拒約運動」の盛況ぶりを宣伝・訴えます。その間、東北において早くに愛国志士と謳われた鄧潔民、馬駿らと接触するなかで、ソビエト社会主義革命の影響を受け始め、ドイツ、ロシアへの渡航、考察の願望が芽生えていきました。1919年、名古屋の第八高等学校で勉学に励むなか、国内の「五四運動」を声援するための留日学生を組織したことで、日本当局によって「排日の巨魁」、「社会主義分子」と目されるようになります。同年末、キッパリと学業を捨て中国人労働者への救済事業に従事しだした王希天は、知識分子と労働者運動を結びつける革命の道を模索し始めます。1922年、王家禎、王朴山、孫宗堯らと「中華民国労働同胞共済会」を創立し、王希天は会長に推薦され、留日華僑同胞の領袖的人物となりました。1923年の大地震が発生したとき、彼は危険を顧みず中国人被災者の捜索を行い、その時、日本軍国主義分子によって秘密裏に逮捕され、殺害されたのです。享年27歳の若さでした。

時は過ぎ、祖父が私たちから離れて九十年が経ちます。新中国が成立し、私と家族は周恩来、鄧穎超ら政府中央の指導者の配慮・支持のもと、70年代から烈士・王希天の史料の調査収集活動に着手し始めます。このことははっきりと憶えています。そして、国内における調査収集を基礎とし、また幾度も日本に渡り、烈士・王希天の革命遺跡を訪れ、いくつもの貴重な歴史資料を発掘してきました。中国社会科学院近代史研究所、吉林省社会科学院、吉林省党史弁公室、吉林省档案局、吉林省革命博物館など関連部門も、烈士・王希天の生涯における業績および文物資料の収集と整理、研究を相次いで展開していき、段階的成果を納めてきました。これらは後の研究活動における一定の基礎となっております。

党の十一期三中全会（1978 年）以来、改革開放政策は王希天研究にこれまでにない契機をもたらします。90 年代に入り、吉林省、長春市などの地方の党、政治指導部門の配慮と指示のもと、中日両国の学者による共同の努力によって、王希天および華僑虐殺事件は七十年余りの歴史を経て、ついに世に出ることになったのです。世間に知られることにともない、日本における冤罪を雪ぎ、かつ烈士・王希天の顕彰および研究活動も深まっていきます。1994 年、長春王希天研究会が正式に成立したことは、王希天研究が正しい軌道に乗ったことを意味します。約十年、研究会は絶えず宣伝と研究活動を堅持してきました。1996 年、研究会は王希天生誕百年の記念活動を挙行、これにより顕彰と研究活動は新たな段階へと押し上げられます。吉林省革命博物館による「王希天 生涯における業績展」が長春でとり行われ、続いて北京、遼寧、黒竜江などの地で展覧が行われました。王希天烈士陵園は長春嶺で落成し、同時に対外的にも開放されます。その間、研究会と関連機関の合作によって、十部余りの著書・写真集が次々に編集出版されていきました。特に王希天の家柄、生涯、言論、思想の研究に関してはこれまでにない進展を見せ、歴史における人物評価に対しても新たな認識と昇華を生みます。王希天は中国近代民主革命史のなかの優秀な人物の一人であり、中国民主革命の二つの時期、すなわち旧民主主義革命と新民主主義革命を経験しました。彼のその若く短い人生には反帝国主義、反封建主義、革命的志向が鮮明に彩られていました。王希天は近代中国民主革命時期に現れた愛国の先駆であり、「拒約運動」の卓越的な提唱者であり、留日華僑子弟からの傑出した代表、華僑労働者から推戴された著名な指導者であったのです。

孫として祖父の歴史資料、革命遺跡の調査研究に従事するなか、祖父は遥か遠い過去から現在に至るまでの愛国の巨頭であったと私は感じます。彼の人生には生命の覚悟、生命の抗争、生命の献上の全過程が存在します。彼が学んできた報国の思想、革命警世の思想、宗教の救世思想など、その多層的な思想の構成ならびに独立的精神体系は、彼の精神体系の思想の核心を支えています。すなわちそれらが彼の精神内部の深いところにある生まれながらの愛国主義の情を支えているのです。貧しく弱い近代中国において、祖父が学び体現した報国の執着、運命自主の孤独、革命警世の強さ、宗教救世の敬虔さ、衆生救済の悲壮、それらは愛国の先駆者にある高尚なる品行と、多彩で豊富な精神世界を構築しました。彼は民族の屈辱の時代において反帝国、反封建という人生の選択をしました。明滅する民族民主革命思想の言論、悲壮に彩られた人生、それはみな後世に託された、貴重な生命の反省と啓示であります。王希天は愛国の先駆者であり、彼と時代の関係はまさに太陽と生命の関係に似ています。彼の存在と消失を回避することはできません。時は彼に命の燃焼を

与えたと同時に、命の消失も与えました。ただ、王希天は時代と生命の承諾に関して、確実に常人の境界と体験を飛び越えていると思います。彼は外国による侮りに抗う前線に立ち、民族としての屈辱を受ける現実に直面しながら、時代が与えた命の燃焼と消失を迎え入れたのです。王希天からすれば、民族と国家の利益は全てに勝る。彼の命の燃焼は「浮世の光明を求める」ため、彼の命の消失は「衆生の解放」のためであり、その意義において、王希天の若く短い生命は一つの愛国主義の石碑となり、その石碑はまた現実のなかにおいて彼の朽ちることのない精神、永遠なる英魂という祭壇となります。これは誰にも真似できないでしょう。

日本の民間の王希天研究はすでに三十年の歴史があり、特に70年代の中日国交正常化以来、日本国内では正義感ある学者たちが日本軍国主義による中国侵略の罪を反省しており、それと同時に、関東大震災時期における王希天および華僑事件の研究も始まっていました。日本の友人である今井清一氏、石井良子氏、仁木富美子氏、宮武剛氏、田原洋氏、遠藤三郎氏、大田堯氏、山住正己氏、及田一夫氏など、辛苦を厭わず中日両国間を行き来し、辛く丹念な調査研究活動を多く展開し、前後して非常に価値ある著作を出されました。その著作の内容は当時の日本軍国主義の非人道的行為を批判し、王希天および華僑労働者の虐殺事件の歴史の真相を世に知らしめたものです。このことはまさに中日両国人民の友誼を促進させ、王希天研究を深く押し進め、あるべき歴史的作用をもたらしたといえます。特に山住正己さんの提唱のもと、日本国内で王希天君追悼会が成立し、烈士・王希天の記念活動と研究に尽力しました。1993年（関東大震災の時殺された）中国人労働者を悼む会の提起により、義捐金を募り、温州華蓋山において新たに「王希天義士記念碑」が建てられました。半世紀のあいだ華蓋山で眠っていた壊れた碑は、中日両国の努力によってついにその歴史的原型を復活させたのです。そのまっすぐに高くそびえ立つ石碑は、世の人々が忘れえぬ歴史の瞬間を背負っており、王希天の生涯と業績を物語っています。記念碑復建の開幕式典において、中国人労働者を悼む会の訪中代表団団長である大田堯さんは、王希天の人格を高く評価し、日本軍国主義者が中国人民にもたらした災難に対し、会議に出席している中国代表と各界の人々に対して深く懺悔を表しました。そして最後に「本日、日本の教育界一万六千名の教師と知識人が千六百万円を寄付し、王希天義士の記念碑を新たに建て直しました。犠牲者の魂が永遠に安息できるよう祈り、この大切な犠牲が生きている人々の心に教訓として残り、永遠に平和を追求することを願う」と述べられました。

日本国内における王希天記念活動と研究活動は、中日両国人民の歴史の長い友誼と、平和で美しい生活を尊重し維持する思いを体現しており、この活動は両国人民の根本的利益

に符合しています。日本の友人たちが発表している著作の内容からは、王希天の生涯と思想の深い研究に関して、重要な啓示と見習うべき点があります。まず、日本の友人は王希天研究の過程において、中日友好の態度とヒューマニズムの立場に立って王希天という人物の個別研究に臨んでおり、近代中国と日本の研究を広く開拓し、資本主義社会の主流的価値観と社会主義の核心的価値観の衝突と融合を実現しています。異なる社会の価値観における衝突と融合は、ヒューマニズムに向かう歴史研究のなかでは、互いに比較・参照され、最終的に人物の歴史的相貌を還元するというスタンスの上では、道は異なっても行きつくところは同じであり、さらなる深い階層とさらなる広い領域から、王希天の生涯、思想、品行、成果に対する総合的研究を完成させるものです。このことは今後の歴史研究と人物研究に、国際的な学術交流の模範を提供したと思います。また、学術研究に国境はありません。日本の友人たちは学術研究の分野において、実直な態度と謹厳で真実を求める精神を表出させており、我々も非常に注目しております。日本の民間から出版された王希天研究に関する著作のなかには、学術の追求と人文の精神が体現されており、王希天の人物イメージをさらに模範的かつ人間的に描いています。論稿中に再現される王希天は、昔ながらの歴史人物研究にあるような「人の神格化」でなく、いきいきとした真の愛国先駆者として描かれているのです。このような学術研究の成果はヒューマニズムを基礎とし、歴史人物の研究レベルを押し上げる点で、学術的に特別な意義を有します。また、日本の学者は歴史人物研究の過程において、理性的に資料の選定と論述を行い、より多くの実証の探究を前提とし、証拠を求めることにより実際の結果とします。特に史実の叙述に関して、より多くの理性的思考を主とし、資料の叙述と充実を補っています。これは歴史人物の研究上、一種の有効な手段だといえます。理性は人物の思想の本質を認知でき、人の思想の境界を昇華させ、感性から理性の認識に飛躍させます。理性は歴史人物に魂をあたえ、魂は歴史人物に理性的生命をあたえる。この点において、王希天を研究する論述のなかでは日本の学者はその表現がとくに顕著であります。

ここにおいて、私は随行する記念活動参加者の学者および私の家族を代表し、貴国の多年に渡る王希天研究活動への従事、並びに多くの成果を残された学者の皆様に、また今回の記念活動においてご苦労された日本の友人たちに、衷心から感謝の意を表します。

本音を言えば、毎回、祖父の熱い血潮が撒かれた日本の地を踏みしめるたび、ある種の強烈な国際主義の責任と、生命に対する感懐が心のなかに流れ込んでくるのです。この一世紀近くの間で、中国はきわめて大きな変化がありました。祖父の時代に追求・奮闘した中国は、すでにその威風を取戻して富み栄え、世界における民族の林として屹立していま

す。今の世は、平和的発展を基礎とする国際環境が人類社会の主流となっており、この流れに逆行しようと企図する者がいても、その者は最終的に自縄自縛に陥り、世界各国の人民により唾棄されるでしょう。烈士・王希天の後代として、私は中日双方が歴史を忘却せず、両国の有識者たちが歴史の正義と公道を追求するなかで友誼を形成し、両国人民が幾世代に渡って友好的であることを心から願っています。

中国の歴史を少しでも読んだことのある人ならご存知かもしれませんが、古代の哲人である荘子はかつて闊達かつ超然的態度でもって人の生命を見ていました。世の万物はみな無限の時空で無軌道に動いている。ただ朽ちることのない精神の英霊は永遠に存在し、天空にて白雲とともにあり、悠然と天地の間に存在し続ける。祖父は中国の近代から現れた愛国の先駆者であり、早逝ではあるが、その実は「逝けば曰〔すなわ〕ち遠ざかり、遠ざかれば曰ち反へる」である。子孫は常に祖父の魂とともにあります。白雲千載（千年たっても変わらない雲)、それはまさに祖父の英霊であり、永遠に中日両国人民とともにあり、ともに日本国内の右翼勢力に反対し、日本の軍国主義復活を警戒し、歴史の悲劇の再演を止め、アジアと世界の平和と発展の護持に新しい歴史的貢献を果たすでしょう。

祖父王希天の殉難九十周年祭にて、天にいる祖父の英霊を慰めん。

有難うございました。

2013 年 9 月 8 日